

第 1 回国際インスツルメンツ会議と展覧会に出席して

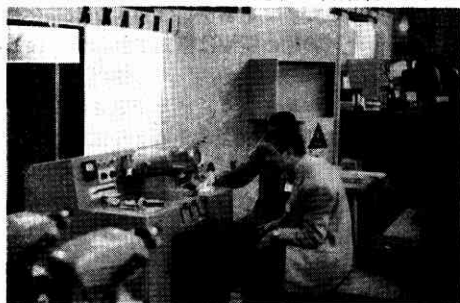
高 橋 安 人



ISA 会議開会式

1954年9月13日から24日までフィラデルフィアで開かれた First International Instruments Congress and Exposition は少くもその規模の大きい点で画期的な催しであったと思う。主催は Instrument Society of America (ISA) であるが、ASME, AIEE 他8学会が参加し Instruments と Instrumentation (計装) を中心とする広い新分野に関する講演会と展覧会が10日余にわたって盛大に行われたのである。筆者は学術会議からの代表としてこれに出席し、また研究を発表することができた。

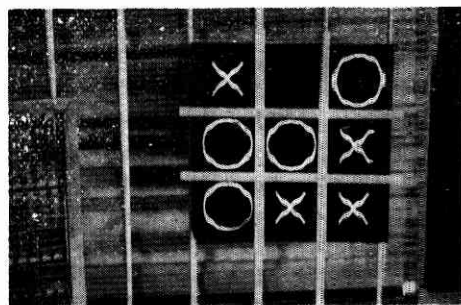
講演会と討論会等は9室に分れて開かれた。発表された論文約200、討論会や講義が約50、その内容は特に生産工業の自動制御を中心に、計算機器論、工業計測、試験法、さらに原子力、気象、生物その他さまざまな領域の計装論から分析、顕微鏡応用、最新の特殊測定法等に及んだ。Instruments を“計器”と解釈して自分に関係のない他分野であるかのように考えるのはいましむべきであると痛感した。それは決して“計器”とか“計測”に局限されるものでない。適当な訳語がないが、これこそ工業界はもとより自然科学界の急速な明日への進歩にもなつて現われた新分野といつてよからう。特に筆者が目にしたのは“計算制御”(computer control) つまり従来の自動制御を発展さ



日本 A 製作所の 展示場

せて人工頭脳の下に全自動化しようとする方向に関する論文、自動制御用語や自動制御教育についての会合——ここでは筆者が日本の近況も紹介した——、新原理の機器についての論文等であった。

機器展覧会は正味約2,000坪(通路を除く)の展示面積に日本を含む6カ国499社が出品し、連日約3,000人の観覧者を迎えた。ここでも全自動化への急速な進歩が目された。特に検出量(温度その他)をデジタル化して高速度にタイプライタで打ち出す方式、またフチログおよび数式計算機の進歩が目立ち、両者が結合して“考える機械”として登場する明日を暗示するかのようであった。自動制御機器は小型化の傾向が目立った。またこのような華やかな面ばかりでなく、制御弁のような制御要素の出品が多数あったことは、この国の着実な進歩を示すものと思った。出品物の一つに、人間を相手に五目ならべならぬ三目ならべをする“判断機械”(decision machine)があった。筆者も数回手合せしたが、うっかりミスすると機械にしてやられ



3目ならべ、機械の勝!

た。日本からのものでは特にA製作所が気の利いた出品ぶりで賑っていた。関係官庁が早くから予告筋されていたこの会議への出品を、もっと速くかつ遠回りに関係会社へ周知させたら、もっと日本からの出品があった筈であり、世界に対し好ましい作用を及ぼしたであろうと残念に思った。

米国をはじめ英・独・仏等の自動制御学者や技術者が親しく会って語り合い、将来の友情と協力を約束する点でも非常に有意義な会合であった。その懇親を深めるため16日夜にはデラウェア河に船を浮べる催しがあった。中天にかかげる月まで注文してあったが、雲に遮ぎられて着荷しなかった。(1954.11.8)

註) 自動制御研究会資料64号および自動制御4.5号も参照。